

平成26年度外部評価委員会議事録

徳島県立総合高等学校とくしま政策研究センター

1. 日時

平成27年3月24日（火）14:00～16:00

2. 場所

徳島県立総合高等学校1階まなびあーる一む

3. 出席者

外部評価委員会委員

玉有委員長，友滝副委員長，杉本委員，田中委員，田村委員

政策研究センター職員

七條所長，佐々木副所長，尾関主任研究員，森本研究員，吉野研究員

関係部署職員

林係長，森脇主任（南部総合県民局経営企画部）

紙屋課長補佐，久原課長補佐（西部総合県民局企画振興部）

4. 委員会実施概要

開会挨拶 七條所長

評価基準，評価結果の取扱いについて

平成26年度調査研究結果報告及び質疑応答

平成27年度研究テーマについての助言・提言

5. 議事概要

議事1「評価基準，評価結果の取扱いについて」

(1) テーマ性，ニーズ把握，(2) 研究の内容，(3) 研究の活用の3つの視点ごとに各委員（6名）が，「5 非常に優れている，4 優れている，3 普通，2 あまり評価できない，1 評価できない」の5段階評価で採点を行い，委員全員の採点結果の小計と全評価項目の合計，併せて委員からの所見の代表的なものを公表することについて，各委員から了解を得た。

議事2「平成26年度調査研究結果報告及び質疑応答」

1) いこうや木屋平プロジェクト！調査研究に関する質疑応答

○A委員：道の駅での学生の実習が県内大学の授業のプログラムになると新聞で見たが，ここから派生したものか。

○A研究員：地方創生のなかで，市町村，国交省の管轄でも学生に地域に入ってもらって，ひいては地方に就職していくという流れで実施される事業である。

○A委員：学生と地域のマッチングをするような所はあるのか。

○A研究員：県立総合高等学校として大学との連携を強化し，学生が地域に入る授業作りの

サポートを行っている。

○B委員：この研究で、研究員としてどのような役割を果たしたのか。

○A研究員：コーディネート機能。個々の先生と地域のつながりだけでは限界がある。

2) 「6次産業展開型プロジェクト調査研究」(キクイモプロジェクト)に関する質疑応答

○B委員：学術的エビデンス獲得の見通しは厳しいのか。

○B研究員：期間にしても予算にしても相当規模が必要となり、調査研究の枠内では厳しい。

○C委員：学校給食で地元の生徒に食べてもらうところから入ってはどうか。

○B研究員：給食に目を付けることは考えたが、整腸作用などが非常によく、子供に提供するにはある程度気をつけなければならない。

○C委員：いきなり学術的というのは難しいかもしれないが、老人介護施設など地元になんか少しずつ卸していくことが必要ではないか。レシピを配布したりしているか。

○B研究員：卸先のスーパーにレシピを置いてもらっているが、なかなか手にとってもらえていない。

○D委員：昔に比べてキクイモを見かけなくなった。生産者の取り込みが必要ではないか。

○B研究員：キクイモ研究会の会員の方は熱心に作られている。一方、外来植物であり作ったわ、放棄したわ、にならないような配慮も必要。

○E委員：生で食べるにはどういった食べ方がおいしいか。生での食べ方をPRして売れる可能性はないか。

○B研究員：サラダとして、ドレッシングをかけて。食感がシャキシャキしている。ただ食材としてめずらしく、なかなか手にとってもらえないところがある。

3) 「6次産業展開型プロジェクト調査研究」(青色八朔プロジェクト)に関する質疑応答

○A委員：今後、この取組を引き継いでやっていく所があるか。

○B研究員：八朔自体が利用されるかは未定であるが、柑橘類が海外からも注目されており、冷蔵技術、データは生きていくと思う。

○B委員：プロジェクトは終了となるが、継続・発展の展望はどうか。

○B研究員：八朔の冷蔵を進めていくかについては未定であるが、関わった学生・生徒がこうした取組に興味を持ちつつ、次を展開することに期待する。予算を付けてではないが、フォローアップする部分があれば、何らかの形で関わられたらと考える。

4) 離島への移住定住促進・交流人口拡大のための調査研究に関する質疑応答

○C委員：アイランダー2014(全国の島々が集まる祭典)にはどれくらいの所が来てい

るか。

- C 研究員：参加しているのは70くらいの島。
- C 委員：徳島県の島に関して、南海トラフ地震の際の津波を心配する質問はなかったか。
- C 研究員：直接自分が聞いた質問ではなかった。
- C 委員：来場者が徳島県の離島に興味を持ったという手応えはあるか。
- C 研究員：実際に島に来てみたいという回答を得られたし、昨年度の来場者で実際に島に来られた方もいる。
- E 委員：出羽島アート展、伊島芸術祭の来訪者にアンケートを実施しているか。
- C 研究員：出羽島アート展では、商工会がアンケート調査を行っている。
- E 委員：近隣の人だけが毎年見に来るのではさほど意味が無い。アンケートを取って、しっかり分析することが重要で、政策研究センターとしてもアドバイスしていくことが有効でないか。
- B 委員：住民の外部への閉鎖的意識の改革というのも大きな効果であったのではと思う。

5) にし阿波集落再生・活性化人材育成モデル研究に関する質疑応答

- A 委員：地域の活動を行政がつぶすことなく上手くサポートできればよいと思う。
- D 研究員：場合によっては連携できるかもしれないし、少なくとも情報共有できればよい。
- B 委員：地域の活性化に行政に期待する声がある一方、行政主導では上手くいかないという意見もある。この点に関し、調査研究で議論はあったか。
- D 研究員：行政職員など中間支援する人の役割は、俯瞰的に見て地域を下支えすること、目標はぶれても修正すればよいという研修内容であった。
- C 委員：行政は前に出過ぎず、情報網を張り巡らし何かの時には力を貸してあげるという立場が求められる。
- B 委員：地域おこし協力隊や集落支援員に対する支援的な研修のアイデアはいいと思う。地域おこし協力隊の圏域ごとのネットワーク展開が期待できる。

6) 調査研究全体に関する質疑応答

- B 委員：プロジェクト研究には、どこかの時点で行方について判断することが必要。政策研究センターとして、調査研究の枠組そのものの再確認、整理をするべき時期になっていると感じる。

議事3「平成27年度研究テーマについての助言・提言」

- B 委員：大学への委託調査研究が新たに設けられたのは、県立総合大学校の所掌事務の中に高等教育機関との連携が加わったということが背景か。

- 所長 : 地域の課題解決に役立つ人材育成として大学を支援しており、大学の研究員である先生方にも地域の課題解決につながるような研究をやっていただきたいということ。
- E委員 : 地方創生における県・市町村のプランづくりに、政策研究センターは絡んだりしないのか。
- 所長 : 地方創生の県の担当部局である政策創造部の機関として関係するところに関わっている。
- B委員 : 地方創生の所管部局と密接に連携をして調査研究を進めていただけたらと思う。
- 所長 : 人口減少が喫緊の課題であり、その方向性を見据えた研究テーマとしているので、反映できるところは反映させていきたいと思う。
- B委員 : 期待は大きいので、政策研究センターの人的な体制面についても、引き続き充実をいただきたいと思う。
- A委員 : 6次産業展開型プロジェクトをきっかけに、県の他部局で引き続き取組を進めていただきたいと思う。
- 所長 : 冷蔵技術などを活用した取組は継続して進んでいくと思うし、研究会での料理人の方々へのPRが次につながっていくことを期待したい。

**平成26年度 徳島県立総合大学校とくしま政策研究センター
外部評価委員会 評価結果一覧表**

番号	政策課題研究名	(1)テーマ性, ニーズ把握	(2)研究の内容	(3)研究の活用	合計
1	いこうや木屋平プロジェクト! 調査研究	25	23	21	69
2	「6次産業化展開型プロジェクト調査研究」(キクイモプロジェクト)	26	24	22	72
3	「6次産業化展開型プロジェクト調査研究」(青色八朔プロジェクト)	25	21	20	66
4	離島への移住定住促進・交流人口拡大のための調査研究	26	24	23	73
5	にし阿波集落再生・活性化人材育成モデル研究	27	25	22	74

※1 評価項目の視点について

(1) テーマ性, ニーズ把握

①地域課題, 地域再生等の課題解決を適切に踏まえた内容となっているか。②県内経済, 中山間地域等への波及効果・活性化が期待できるか。③今, 実施すべき必要性があるものか。

(2) 研究の内容

①創造性や新規性に富んだものか。あるいは, 新しい価値観(地域知), 可能性を広げるものか。
②調査や検証が十分行われた内容となっているか。③大学等の高等教育機関, 非営利組織, 民間企業, 市町村, 県民等との連携協力, 協働, 参画等が得られたものか。

(3) 研究の活用

①政策立案, 政策提言への活用に繋がるものか。②実用性, 実現可能性が高いものか。③生涯学習の意義・役割・推進を果たすものか。

※2 評価基準と評価結果の公表について

(1) (2) (3)の視点ごとに各委員(6名)が5段階評価「5非常に優れている, 4優れている, 3普通, 2あまり評価できない, 1評価できない」で採点を行い, (1) (2) (3)ごとの委員全員の評価結果の小計, 全評価項目の合計, 併せて, 各委員の所見について代表的なものを公表する。

平成26年度 徳島県立総合大学校とくしま政策研究センター 外部評価委員会 所見一覧表

番号	政策課題研究名	(1)テーマ性、ニーズ把握	(2)研究の内容	(3)研究の活用
1	いこうや木屋平プロジェクト！調査研究	<ul style="list-style-type: none"> 本県の特徴的課題である過疎化、高齢化にテーマを決め、時代のニーズに合った調査研究である。 過疎地の活性化は徳島にとって喫緊の課題であり、テーマは時宜になっている。 高齢化や人口減少の著しい過疎地域において、集落の活性化は大きな課題であり、今、実施すべき内容である。 目的が、プロジェクトそのものの達成(成功)にあるのか、ケーススタディとして地域連携のモデル(仮説)を得ようとするのが不分明。 	<ul style="list-style-type: none"> 学生の若い視点から地域を見据え、WebやSNSを十分に活用することによって、新しい発見がされたことを評価する。 学生が地域の人と交流しながら映像を制作している点を評価。交流継続の取組みがあればなお良かった。 グラススキー場のPR映像は、グラススキーの魅力や施設の様子が伝わるものであったが、地元の魅力なども取り入れてPRできれば更に良かった。 研究センター(研究員)の役割と成果を明確にすべき。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域と大学の連携により、両者が共に得ることのできた産物を、次への展開にどうつなげてゆけるのかが、大きな問題として投げかけられた感がある。 PR映像は、作って満足するケースが多いので、今後の多面的な活用が必要。春の木屋平は桜街道として商品化が期待される。 大学のサテライトオフィス等、地域のニーズと学生の活動を上手にマッチングさせる窓口が整備されることにより地域の活性化につながると思った。 年配者は、テレビが一番目に止まるので、各市町毎にあるケーブルテレビに放映できるよう働きかけるとより多くの集客になるのではないかと。 「本県独自の大学連携モデルの構築」につなげていってほしい。
2	「6次産業化展開型プロジェクト調査研究」(キクイモプロジェクト)	<ul style="list-style-type: none"> キクイモに焦点を当て、6次産業化を目指したプロジェクトは、関係機関や生産者にとってのよい意味での活性化となったことは間違いない。 珍しい県産農作物の新たな付加価値創造の取組みとして評価。 地域の産物を活用しての6次産業化は、農地や地域の活性化のために重要な取組みである。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学による機能性成分調査を伴わせ、キクイモを使用した商品の開発ができたことは大きな成果である。 大学における食品の成分分析調査の実施や数々の商談会への参加、またマスコミでのPRなど、様々な機関との連携がとられたものとなっていた。 研究センター(研究員)の果たした役割が余り見えてこない。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭で使われる食材としてのPRを強化し、身近な料理の具材感を多くの人に知ってもらうことが肝要である。 キクイモ自体が珍しい食材なので、おいしい調理法等の開発、発信にも力を入れる必要あり。 他の農産物等にも、同様の取組みが活用できるものである。 キクイモの機能性について、血糖値の抑制効能は確認されなかった。このことを踏まえプロジェクト全体の設計の見直しが必要ではないかと。
3	「6次産業化展開型プロジェクト調査研究」(青色八朔プロジェクト)	<ul style="list-style-type: none"> 全国の生産量第4位である八朔を6次産業化のモチーフとし、実用化にまで発展させたことは評価できる。 八朔の活用策としての目新しさはある。 キクイモプロジェクトと同様に農業や地域の活性化を図るために重要な取組みである。 既存の地域資源について新たな視点から活用策を考えるプロジェクトとして評価できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 八朔を食材としてだけでなく、器や敷きものとして利用し、新たな活用法を生み出したことは興味深い。 保存技術の有効性が実証された点は評価。 プロジェクトにおける研究センターの立ち位置と研究員の果たす役割をもっと明確にすべき。 	<ul style="list-style-type: none"> スタチの冷蔵保存技術が八朔に応用できたことは、今後、他の分野における技術の展開にもつながっていくことを確信する。 今後の安定的な商品化に向けた道筋がつけられるかが課題。 生産者と消費者ニーズを結びつけ、マッチングさせる仕組みを整えることや、生産者への6次産業化への取組みを支援する組織の整備へとつなげていくことができれば良い。 今後、販路拡大を期待している。 プロジェクト研究を実際の事業化につなげていくためのスキームを考えておく必要があるのではないかと。
4	離島への移住定住促進・交流人口拡大のための調査研究	<ul style="list-style-type: none"> 2つの離島にスポットを当て、島が抱える課題を探り、その解決に向けての取組みは関心が高いものであった。 3年間、腰を据えて離島の活性化に取り組んでいる。 人口減少や高齢化の進展の著しい離島の活性化は喫緊の課題である。 定住・交流人口拡大にテーマを絞ったことは良かった。 	<ul style="list-style-type: none"> アイランダー及び移住セミナーへの参加から、都市部に居住する人々からの意見を求め、アンケートや意見の分析を行った点も評価したい。 いろいろな活動を通じて、島民の方の意識が前向きに変わっていった点を評価。 行政の働きかけを元に、島民の方々が島の活性化に主体性を持って取り組んでいこうという気運が高まってきたことは大きな成果である。 多様な取組みによって島民の意識が変わってきたことが大きな成果と考えられる。他の離島における取組事例も情報収集しているが、結果を整理し、島民等にフィードバックすればどうか。 	<ul style="list-style-type: none"> 今後、島の活性化に向けて、島民と他地域の人々を結びつけ、交流人口を増やすことから着手してもらいたい。 伊島と出羽島でそれぞれアートイベントを行っているが、同時期に実施し、案内図なども一体化して発信した方が効果があるのではないかと。 今後も島民の方々の主体的な取組みのサポートを実施していく必要がある。 両島の特性を踏まえた、今後の展開を期待したい。
5	にし阿波集落再生・活性化人材育成モデル研究	<ul style="list-style-type: none"> 平成24年、25年度に取り組んだプロジェクトを基本に、行政職員が自ら参加型研修に臨み、ワークショップ等を通して地域づくりに取り組もうとする姿勢が見えた。 行政職員の意識改革に焦点を当てているのが現実的で良い。 	<ul style="list-style-type: none"> 多くの「気づき」等が得られたと思われ、今後の人材育成に対して、実践的な活動が見えてくる程の知識やスキルを広域的に発展させてもらいたい。 研究内容は准教授に依存しているが、研究会の中味は面白く充実していると思う。 行政職員の研究会だけでなく、地域で活動する住民主体の取組みに参加し、気持ちを共有できたことは今後行政として支援していく上で役立つと思う。 行政職員の研修が過半を占めているようであり、調査研究としては「モデル化」に重点を置くべきではないかと。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域間の連携を強化し、様々な情報を共有することから、地元の人材育成へのあり方をより探求していくことが大切である。 行政職員から今後具体的な取組みが出てくるかがポイント。期待したい。 行政職員だけでなく、地域づくりを住民との間で支援する人材にも拡げていくことができる取組み、自主的、主体的にまちづくり活動を行う住民に対して、有益な情報提供や、必要とする支援を行うことができる行政職員等の育成が必要である。 地域おこし協力隊のネットワーク化、研修については関係部局と協力してぜひ実現してほしい。